The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜習慣＞に関する生態記号論的研究
Author(s)	佐古，仁志
Citation	大阪大学，2014，博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/33999
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　　名　〕＜習慣＞に関する生態記号論的研究

学位申請者　佐古　仁志

本論では、ラディカルな身体性認知科学に代表される環境とエージェントとの相互作用を重視する諸研究を概観することで、そのルーツにプラグマティズム、特にパースの記号論があることを確認した。

そして、しばしば誤解されているパースの記号論を<習慣>という概念を中心に検討することによって、<習慣>というものが<努力>と<共感>という二つの働きによりもたらされていることが明らかになると共に、現代的観点から再解釈することであらたな知見を得ることができるということを提示した。

また、記号論を用いることで、アフォーダンス、情報、エージェントという生態心理学の難解な語を明瞭にした。

そのうえで、記号論的な<習慣>のひとつの側面である<努力>について、ニッチおよびニッチ構築について考えることでアフォーダンス学習の機会を提供するものではないかということを提示した。また、記号論的な<習慣>のもうひとつの側面である<共感>を考察することで、生態心理学における<共感>の働きが、他者の直接知覚にあるという可能性を示すと同時に、他者の行動からアフォーダンスを学習するための道筋を示した。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　佐古仁志　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主　査	教授	檜垣立哉
	副　査	准教授	村上靖彦
	副　査	教授	中山康雄
	副　査	立教大学教授	河野哲也

論文審査の結果の要旨

本論文は、『＜習慣＞に関する生態記号学的研究』と題され、全体で三部七章に分かれ、そのほかに補論が付されたものである。本論考の骨子は、アメリカの記号学者チャールズ・サンダース・パースの記号論、チャールズ・ダーウィン以降の生物学の領域における進化論、そしてジェームス・ギブソンの生態心理学以降の発展を、論者なりの視点から統合しようとするものである。この三者は、確かに展開されている時代もそのバックボーンも異なってはいるが、密接な関連をもっている。論者はそうした関連を、デューイやジェームズなどのプラグマティズムの系統の共有として位置づける。そしてその視点から、記号論者パース自身が進化論の議論を自分流に展開し、さらにはその記号論そのものが二〇世紀後半以降に生物記号論へと進展していること、ギブソンの生態心理学の議論も当初は視覚心理学的なものであったが、次第に生物学的な要素や進化の議論をとりいれていること、そして進化論そのものが、遺伝子の発見後も単純なネオダーヴィニズムにはおさまらないさまざま環境との議論との関連で提示されていること、これらを論じつつ、自身の議論を補強し議論を組みたてていく。

こうした議論の展望はかなり広いものであるが、プラグマティズムや現在の生物学の哲学を土台とした発想は、オリジナルなものでありながらも、さほど無理のないものであると考えることができる。そして、より議論を限定するテーマとして＜習慣＞という、プラグマティズム以降の思考になじみの深い事例をとりあげている。

本論の序章においては、プラグマティズムを軸とした、進化論、記号論、生態心理学との連関づけが主張され、おおきな道筋が示される。第一部においては、とりわけパースの記号論についての検討がなされ、まずはパース論という枠組みのなかでの進化論の処理、習慣論の展開、記号論の立場から考えるエージェントとしての主体やそこでの意識の問題が探求される。ここではアガペー的進化を論じるパースの、一見すると古風な進化論が、環境やニッチの観点からすると理解可能であることが示される。第二部においては生態記号論が主題化され、ギブソン以降の生態心理学が次第に生物学にかかわるかたちで展開され、そこでは記号論的な知見が重視されるようになっていることが論述される。ギブソン以降のネオギブソニアンたちによる、こうした議論の展開を説明し敷衍する部分は論者の論考のなかでもっともオリジナルな貢献度が高いものであると考えられる。そこではとりわけ「情報」という概念が、生物学的な形態形成でも、たんなる言語的な要素でもない記号論的アプローチの到達物としてみいだされ、エージェントの議論がとらえなおされる。第三部においては、生態記号論の独自の展開例が様々に検討され、その過程のなかで、進化が進化するもののみではなく、ニッチとしての環境をも形成し、そのなかで自らのあり方を獲得する仕方、あるいはミラーニューロンやあるいはそこでの共感概念の思想的位置づけの分析などがおこなわれ、習慣論としての論の全体のとらえなおしがはかられている。また補論において、生物学の進化論における生態学の議論の一例として、個と種に関する生物学の哲学の根幹をなすとおもわれる主題が議論されている。

本研究は大きな射程をもちつつ、全体としては生命・記号・環境という三つの現代哲学がとりあげるべ

き要素を、パースの記号論や生態心理学の展開、さらにはミラーニューロンといった脳科学の分野での最新の知見ともむすびつけ、それぞれの議論の細部にわけいりつつ展開していることに特徴がある。また進化の単位である、種や個体の問題についても一定の見解をしめしていることは十分に評価できるものとおもわれる。生態心理学は二〇世紀後半になり、アフォーダンスという呼称によってさまざまな拡がりを見せるものであるが、論者の議論は、記号論や進化論と連関させることにより、それが一領域分野の科学としてのあり方をこえて、きわめて広い思想的なつながりのなかに位置づけられ、また逆にそのようなものとしてこそ、今後の発展も見込まれうる。本論文はそのことをよく提示しえているものとおもわれる。

参照されている論考などは十分なものがあり、また個々の章をなす論文は、それぞれ学会そのほかで発表され、査読を通ったものも含まれており、その意味でも、本論は客観性のある評価をすでにうけているといえる。参照されている論文などからみても外国語とりわけ英語に関する能力も十分にあると認められる。

よって本論は博士(人間科学)を付与するのにふさわしい論文であると判断される。